

IPANGU

16世紀後半頃から、西洋諸国のアジア進出を背景に海外貿易が盛んになってきました。当時、取引での決済は主に金銀が使われました。戦国時代末期から各地で金銀山の開発が盛んになり、安土・桃山に代表されるきらびやかな文化が花開きました。

マルコポーロが東方見聞録で「黄金の国ZIPANGU（ジパング）」と記しているように、日本は黄金に輝く国に見えたのでしょうか。

その中心を担ったのが佐渡であり、徳川幕府は、相川に奉行所を置き、直轄地として支配しました。

その後、明治になって相川金銀山は、皇室の所有となり、三菱による民間経営を経て、平成元年にその役割を終えました。

その佐渡が今、再び世界から注目されようとしています。

佐渡金銀山は2010年11月22日
ユネスコの世界遺産暫定一覧表に
記載されました。

〔世界遺産登録件数 962件〕
日本の登録は 16件
(2012年7月現在)



道遊の割戸（国指定史跡）
慶長6(1601)年、相川金銀山発見の端緒となった大鉱脈「道遊」の採掘跡。江戸時代には主に地表部の採掘が行われたが、明治以降も下部で大規模な開発が行われた。



大立堅坑（登録有形文化財）
明治10(1877)年にドイツ人技師の指導により完成した日本初の西洋式堅坑。この鉄製のやくらは、昭和13(1938)年頃からの金の増産体制時に建設された。



京町通り
奉行所と金山を結ぶ江戸時代の繁華街跡。往時には京都や大阪の呉服商たちの店が軒を連ね、3階建ての家もあったという。



シッケナー
直径50mの鉄筋コンクリート製で昭和13(1938)年頃からの金の増産体制時に建設された。泥状の鉱物を鉱物と水に分離する施設。



北沢火力発電所跡（佐渡金山近代写真展示館）
明治41(1908)年に完成した石炭火力発電所。500kWのsteamタービン1基が設置され製鉱場が蒸気機関から電動機に代わった。昭和初期の大増産時には1800kWに増強された。



大間港
鉱石や石炭などを搬出するために築港され、明治25(1892)年に完成した。石灰のたき工法護岸と1.2tクレーンの台座やレンガ倉庫が現存。

〔金を中心とする佐渡鉱山の遺産群〕
佐渡を世界遺産に

世界遺産推進基金の寄付金募集

新潟県教育庁文化行政課世界遺産登録推進室 TEL:025-280-5726
佐渡市世界遺産推進課 TEL:0259-63-5136